



日口交流

発行：特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



念願のロシア文化交流 - ロシアが大好きになりました

笠原 以津子

千葉さんから色々と教えて頂いていた為、不安もあまりなかったのですがやはり初めての事で、私に出来るかな？でもとにかく「一生懸命」をモットーに頑張りましょうと出発。初ロシア、ノボシビルスク空港に着き、迎えに来て下さった通訳さんの優しい笑顔で不安も消え、空港から市内へ。その車窓から見た街並みは、想像をはるかに超えた美しさ、そして統一感ある控えめなデザイン。（海外に行く度、疑問に感じるのが日本のこの点です）そして列車移動までの間に感じた人々の温かさや自然さにホッとして、これなら文化交流もバツチリに違いないと確信致しました。

バルナウールでの初講習では、お集まり頂いた皆様が、ちょっとだけ練習した私のロシア語での自己紹介を熱心に聞いて下さり、大拍手を下さいました。親近感が増した所で実演とワークショップがスタート。実演を熱心に見て下さり、それぞれにご自分の世界観で取り組む姿勢。日本での大使館等で接してきたロシアの方々同様の、一心不乱的なその情熱に惚れ惚れ。そして、普段から思っていた「ものづくり、アートは世界共通」これを更に実感し、念願の文化交流第一回目はとても和やかに終わりました。

自分の講座が終わると、他の講座のお手伝い。実はこれもすごく楽しみだったのです。実際に和裁、風呂敷、茶道に触れ、お手伝いができ、真近で剣術を見る事ができるというのはとてもラッキーな事ですもの。実際、とても勉強になりました。そして種目は違っても、日本文化は繋がっていると実感し、今少くなりつつある日本人の日本文化への意識を、もう一度考えていいかと思います、同時に自分に出来ることは何かを考えました。

ロシアの街中の木々はとても美しかったです。「黄金の秋と言うのですよ」と千葉さんが仰る通りです。日本の葉の黄色とも少し違う。空も雲も星も、それはそれはきれいでした。これも日本のそれとは少し違う美しさです。人の美的感覚はこういうものから生まれ、育っていくのですね。

以前、インド、クロアチア、カナダ、アメリカの方に同時にワークショップをした時の事を思い出しました。面白いほど描かれたものにそれぞれの「国」が出ていた事を・・生まれてから見てきたもの、周りの風景、自然、家の中etc. それが人の色彩や美的感覚を作っていくのかしらと思ったことを。日本の昔からの色は深く、控えていて、とても美しいものですね。そして昔から伝わる和柄は素晴らしいものばかりです。(先程申し上げました最近の日本の看板や広告など、どうしてこれを使わないのかと疑問です)

私に出来る事は、友禅で美しい日本の伝統色や柄を伝え、残していく事かもしれないと思いました。それにはもっともっと勉強しなくてはならないです。友禅の世界に入って35年。これ

きもの
KIMONO



日口交流バスツアー2018（松本城・諏訪湖・チロルの森）に参加

松本 泰男

11月4日（日）朝8時、ロシア大使館前から38名の団体がバスで一路長野県の諏訪湖に向けて出発しました。一行は28人のロシア大使館員及び通商代表部職員とその家族・子供達、そして日口交流協会の日本人10名の親睦旅行です。中央自動車道を経て長野自動車道、途中トイレ休憩を取りながら順調に諏訪湖畔に到着。昼食後最初の目的地である松本城へ。

季節が良く、そこかしこの紅葉が実に見事で美しい城郭です。幸運にも長く行列すること無く天守閣へ。かなり急な階段を何とか最上階までたどり着き、眼下に松本市を見晴らしました。旅行の数日前NHK・BSの番組で「伝統的な石積み技術」の素晴らしさを知ったばかりでしたので間近に見る石垣には大いに感銘を受けた次第です。

今日の宿泊はKKR諏訪湖荘。チェックイン後すぐ温泉へ。これが澄み切った実に気持ちの良い温泉でした。そして、牛肉・野菜など3種類の焼き物その他バラエティーに富んだ夕食。一段落したところで全員参加のビンゴゲーム。「ビンゴ！」が出るたびに拍手喝采で、皆さん、特に子供達が心から楽しんでいる様子でした。翌朝の朝食がまた美味しいのなんの！バイキングで和・洋お好み次第なのですが、「ごはん」が実に旨い！なんと3杯もおかわりをしてしまいました。

ツアーニー2日目はまず諏訪湖の遊覧船「白鳥号」でのクルーズ。

30分ほどでしたが湖畔の美しい紅葉を充分満喫しました。下船後、散歩がてらのんびり歩いて間欠泉まで。残念な



がら温泉の噴き上がる時刻でなく、間欠泉を見ることは出来ませんでしたが、久しぶりにのんびり・ゆったり気持ちの良い散歩でした。

2番目の訪問地は諏訪大社です。ロシアの皆さんも見様見真似で手水そして参拝。境内では地元の小学生達が育てた菊の展示会が催されており、綺麗な紅葉と相俟って印象的です。

次はツアー最後の訪問地「チロルの森」で昼食、そして自由時間です。昼食のバーベキューはとても美味しかったのですが、朝食でご飯を欲張りすぎたため完食出来ず。残念でした！このチロルの森は空気が爽やかで景色も良く、何といつてもボート池や自転車広場、アルパカや子馬に触れることが出来る広場などがあって、子供達には最高の遊び場です。出発時刻になっても皆さん中々帰ってきません。これだけ楽しいと、まあ致し方なしと言うところです。

帰りのバスの中では宿舎で出来なかった「カラオケ大会」。カチューシャやモスクワ郊外のタバなど、ポピュラーなロシアの曲で盛り上りました。

途中小雨に降られることもありましたが気になるほどでなく、時間的に余裕があつてゆったりと楽しめる素晴らしい一泊二日の旅でした。大変だったと推察しますが、この様な楽しいツアーを企画・運営してくださった日口交流協会の皆様に感謝しております。有り難うございました。（理事）

も交渉次第で、中央アジアなどからきた人が主に販売していた。当時は、食物などが不足がちで、ルイノクは商品流通の補助的な役割も果たしていたと言えよう。ロシアになってからも食物や日用雑貨品などが販売されてきた。そんなルイノクの一つの「ウサチョフスキー」というルイノクに行った。ルイノクそのものは、昔からあったものらしい。今は、しゃれた外観で若者を狙った感じの市場に様変わりである。（写真）中に入ると、これまた、昔とは隔世の感があり。現代感覚のセンスの良いデザインの店やカフェ、レストランがならぶ。そしてそこに群がる若者の多いこと多いこと。当然、彼らのファッションのセンスも最高である。

若者が狭いスペースの中で、ピザやクロワッサンなどを粋な感じで食べている。寿司や焼き鳥のカウンターもある。思わず焼き鳥を食べ、別のカウンターで握り寿司をほおばる。ビールは、まあ一たまには、良いかーと、日本製のものを注文してしまった。モスクワに和食店と呼ばれるものは1000軒を超えるともいわれるが、このカウンターは安価で魚も新鮮であった。

日々のロシアとの仕事でストレスを感じ、ロシアとのかかわりは、正直なところ、もういいと時には思つたりする。しかし、モスクワの発展や変容のダイナミズムに直接触れると強い刺激を受け、また近いうちに来なくてはと思つてしまふ。ロシアは魔物なのかも知れない。



● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

ルイノク（市場）

大原 翔

1年ぶりにモスクワを訪問した。巨大なエネルギーをモスクワには感じる。やはり首都は首都である。全ロシアの富が中央に集中しているのを目で見て、心で感じることができる。今年、サッカーのワールドカップの試合がロシアの各地であり、各都市が整備された。特にモスクワはそれが顕著である。都心の道路や歩道が美しく整備されており、欧州の大都市にも劣らぬというより、超えているのではないか。欧米の対露制裁や何のそのという印象である。

モスクワの中心の道を歩いても、以前は、あまり東京や大阪の雑踏というような感じはしなかった。しかし、今日歩いてみて、大都会の雑踏を感じさせてくれた。歩く人の数が増えているのか、あるいは、歩くスピードが速くなったのか。商店が急増しているためかもしれない。ネオンサインも増えたものだ。年末に近づき人々の心が急いでいるのかかもしれない。

そんな気分の中で知人の紹介で行った市の南部の「ルイノク」（市場）は衝撃的であった。ソ連時代などでいう昔のことで恐縮ながら、市内にいくつかルイノクがあった。これは個人で栽培した野菜や果物、あるいは肉などを国営商店とは別ルートで販売するバザールである。値段



ロシアンカが麻布区民センターふれあいまつりに参加

岡崎 好典

2018年10月21日（日）、ロシア大使館からほど近い港区の麻布区民センターで開催された「第31回麻布区民センターふれあいまつり」に、昨年に引き続き「ロシアンカ」が参加しました。出演時間は11時20分でしたので、私が10時半前に大使館に「ロシアンカ」のみなさんをお迎えにうかがいました。私が付属学校に着いた時には、みなさんは先生のご指導のもと、まだ最終リハーサル中で、とても真剣に取り組んでいました。また、昨年は台風が接近していたこともあり、大使館から会場までバスで向かいましたが、今年は好天に恵まれ、ロシアの民族衣装をまとったみなさんと会場まで行進しました。途中、沿道の人たちからは、とてもかわいらしい「ロシアンカ」のみなさんを見て、歓声が上がったりして、注目的になり、先導している私も、とても気持ちよかったです。

出演の際、まず幕が開く前に、私とオリガ先生とダイアナ先生が舞台の幕の前に立ち、「ロシアンカ」の説明をして、それから幕が開いて「ロシアンカ」の歌と踊りが始まりました。披露した曲は、「コロベイニキ」から「カチューシャ」までの10曲で、「故郷」はもちろん、ロシアの曲にも途中日本語の歌詞も交えながら、美しく澄んだ歌声とチームワークのとれた軽やかな踊りを披露してくれました。歌と踊りがす



べて終わった後は、次の舞台のセッティングが終わるまでの間、「ロシアンカ」を代表してマーシャさんが舞台に残り、司会者からインタビューを受け、「ロシアンカ」のこと、好きな勉強や曲について丁寧に答えていました。「ロシアンカ」は、この日の午前中の一番のハイライトになっていたので、客席からは、とても暖かく、そして大きな拍手をいただきました。

このおまつりへの参加に当たっては、協会の内堀専務理事のほか、坂本、中村（泰）、山岸、平野の常任理事および理事のみなさんに多大なご協力をいただきましたので、心から感謝を申し上げます。昨年は台風のため、観客が少なかったのかと思いましたが、好天に恵まれた今年も、残念ながら、客席はまだ空席がありました。来年も参加の機会をいただけましたら、ぜひみなさまお誘い合わせのうえ、会場までお越しくださいますようお願いいたします。（理事）

ウズベキスタン便り

寺尾 千之



「8月29日にウズベキスタンの大統領より勲章をいただきました」とのメールが、今夏、ガニシェル校長から届きました。1999年に日本人夫妻が創設した日本語学校「NORIKO学級」を舞台に、

日ウズ草の根交流に取り組んだガニシェル校長の実績が、叙勲に値するほど高く評価されていたことに、正直驚きました。タイミングよく貴紙からのご依頼もあり、ウズベキスタンの勲章制度についてガニシェル校長に、メールで、いくつか質問を試みてみました。（Q&Aの原文はローマ字）

Q1. ウズベキスタンの勲章は1991年の独立後に創設された制度ですか？

A1. はい、そうです。独立後に作られました。私がもらった勲章は1994年5月5日にできました。

Q2. 勲章の種類はいくつありますか？ 1年に何人くらいが受賞しますか？

A2. 全部で21種類です。何人くらいの人がもらったかは、情報が見当たりませんでした。ちなみに、私がもらった勲章は「友好勲章」と言われています。今回は、私を含めて二人のウズベク人が受賞しました。ウズベク語で“DUSTLIK ORDENI”といい、二つの国の友好に寄与した人に渡されます。他の国の大統領や大使や国際関係などの方々がもらえる勲章です。例えばウズベキスタン及び世界中で有名な発掘者・加藤九祐様も受賞したそうです。

Q3. 受賞すると年金が増えるなど、何かご褒美のようなものがありますか？

A3. 一括で最低賃金一ヶ月分の30倍の金額をもらいます。

Q4. お姉さまも何回か受賞したそうですね。

A4. 数回受賞しました。例えば“Shuxrat medali”、和訳は「名声の賞」や、“Fidokorona hizmatlari uchun orden”。決まった和訳はありませんけど、意味は「国家のために尽くした人に与えられる賞」などです。

Q5. ガニシェルさんが受賞したときTVで放映されたそうですが、インタビューにどんなふうに応えましたか？

A5. 私が今までやってきた小さなことに対して、こんな賞がもらえるとは、思わなかったです。もちろんこの賞は私だけではなく、NORIKO学級の創設者である大崎先生をはじめ、今までRJCを応援してくださったサポートーの皆様及びボランティア講師の皆様に対する賞です。

Q6. 勲章をもらった後、ガニシェルさんの気持ちに何か変化がありましたか？

A6.もちろんありました。これからも頑張る力になりました。

地元・リシタンの人々にとって、初めて見た日本人が大崎さん夫妻でした。日ウズ双方の一般人同士が好印象を持ったことが原点となり、その後、多くの人々が、現在までの約20年に亘り、草の根友好交流を育んできました。大崎重勝さんも天国からガニシェル校長の叙勲を笑顔で祝福しているに違いありませんね。（リシタン・ジャパンセンター事務局長）

お知らせ

●第50回懇話会

講演会『在日四半世紀 ロシア人が見た日本』

講師：ミハイル・モジジェチコフ氏

日時：2018年12月8日（土）13:30～16:00

場所：東京が団碁大学本郷サテライト4F

会費：一般2,500円、会員／日ロ友好団体／外国人2,000円

一般学生1,500円、会員学生1,200円

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel : 03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

モスクワ「ムゼイ」巡り・その13

コローメンスコエ
Коломенское

大矢 温

モスクワの南東部に位置する、自然公園と屋外博物館が一体化した複合施設である。地下鉄コローメンスカヤ駅を降りて住宅街をしばらく歩いていくと、モスクワ川の河岸段丘の上に広がる広大な公園博物館に行きつく。公園の部分は夏には屋外食堂、秋には蜂蜜市場とモスクワ市民の散策路となっている。もともとはモスクワ大公や皇帝の別荘宮殿のあったあたり、少し高めの場所に位置する博物館エリアには16世紀初めのモスクワ大公ワシリー三世が建造したヴォズネセニエ教会をはじめとしてロシアの歴史的建造物が屋外展示されている（一部移築）。

とんがった八角尖塔が特徴的なヴォズネセニエ教会は1992年に世界遺産に指定されているが、このほかにも17世紀の宮殿の土台や18世紀の北海の要塞建築現場から移築されたピョートル一世の小屋など見どころが多い。宮殿の門だった建物は現在博物館になっていて、石器時代から18世紀に至るこの地の歴史を学ぶことができる。

博物館エリアをさらに南に進むと、ゴロソフ谷（Городок овраг）モスクワ川にそそぐ沢が流れる小さな谷だが、異



教時代の聖地だったらしい。異教の神を祀った宗教行事が行われたといわれる石や、今でもおまじないに木の小枝に布きれ結び付ける人がいたりして、神秘的な雰囲気が残っている。

さらに果樹園の中を南に向かって進むと、2010年に再建された「アレクセイ・ミハイロヴィッチの宮殿(Дворец Алексея Михайловича)」。17世紀にロマノフ朝2代目の皇帝、アレクセイがコローメンスコエに建てた巨大な木造の宮殿が再現されている。ロシアのおとぎ話にでも出てきそうな外観や豪華な内装は一見の価値があるのだが、いかんせん、地下鉄コローメンスコエ駅からは遠すぎる。コローメンスコエの博物館とは別の日程で地下鉄カツシールスカヤ駅から出直すことをお勧めする。

（札幌大学地域共創学群教授）

入場料 屋外無料、ヴォズネセニエ教会、ピョートル小屋：それぞれ100ルーブリ
最寄駅は地下鉄コローメンスカヤ Коломенская、またはカツシールスカヤ Каширская
(<https://goo.gl/maps/rJ8xWuoxzLP2>)

ニコライ・バンドゥラ —モスクワ放送ハバロフスク放送局日本課の初代課長

島田 顕

モスクワ放送のハバロフスク放送局日本語放送の初代課長（編集長）は、ニコライ・バンドゥラという人物だった。バンドゥラは、軍属で階級は中佐、政治部のメンバーであり、1946年5月から1950年にかけて樺太の新生命新聞社副社長をつとめ、その後ハバロフスク放送局に転任した。ウクライナ人、生糸の軍人で頭も切れ、流暢な日本語を話した。戦時中はハルビンにて、国家政治保安本部の活動をしていました。放送局には、日本語課以外に中国語課と韓国語課があったが、バンドゥラは当初中国語課長も兼務していた。

バンドゥラは樺太で、元NHKアナウンサーの石坂幸子、そして元樺太新聞記者の木村慶一をハバロフスク放送局へと赴任させた。二人以外にも、戦後直後に樺太にとどまっていた日本人を引き抜いた。特にバンドゥラが樺太から連れてきた有江逸郎、木村武雄、朝倉勝江、上田光隆、須田金之助らは、ハバロフスクからの日本語放送の歴史のミッシングリングといえる。もちろん石坂幸子と木村慶一以前の石井次郎、東一夫も、バンドゥラがリクルートしたことは想像に難くない。また元抑留者の瀧口新太郎や元抑留者で日本新聞の編集に従事していた川越史郎、赤沼弘らを引き入れた。加えて彼らをモスクワへと転任させた。

ところで、なぜハバロフスク放送局は軍の支配下にあったのだろうか。この疑問は、ハバロフスク放送局の歴史で未だに解決できない疑問だ。この疑問を解決すべく、バンドゥラら放送局関連の軍人たちの個人ファイルの所在を尋ねたところ、国防省中央文書館にあるが、一般の研究者はアクセスが困難だということだった。

軍事史文書館所蔵の川越史郎の個人文書ファイルには、1948年5月31日付で内務省第16ラーゲリ第5支部から樺東軍政治指導本部ラジオ編集部へ、川越と赤沼の二人を引き渡

したこと記した文書がある。引き渡し側にはさらに、“ハバロフスク州無線通信・ラジオ放送に関するラジオ委員会”的スタンプとサインがある。この史料は、抑留者の中からラジオ放送のための日本人職員がピックアップされていたことを表す決定的な証拠であり、ハバロフスク放送局が「極東軍政治指導本部ラジオ編集部」という軍の組織の直接管理下にあつたことを示している。

バンドゥラは強引な人物だったようだ。自分に必要なものならば、執拗に求め手に入る。他方で自分の仕事以外は関知しなかった。木村慶一は、彼を「官僚主義的公式主義」とか、政治的に物事を考える人間だと評している。

やがて日本語課長も代替わりするのだが、バンドゥラはハバロフスク放送局をいつ後にしたのだろうか。またいつ放送局が国防省の管轄からはずれたのかもわかっていない。バンドゥラには息子がいたが、2015年制作NHK・ETV特集のドキュメンタリーに出演した後に亡くなったそうだ。日本人職員だけではなく、ロシア人職員にも目を向けなければならないのはわかっているが、いまだに壁は厚く高い。

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座 00160-9-66486、加入者：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 E-Mail : nichiro@nichiro.org
＊野崎守二氏、服部文男氏からご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。